



Title	End-of-Life Education for Medical/Nursing Students
Author(s)	糸島, 陽子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58176
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【40】

氏 名	いとしま ようこ 糸 島 陽 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 3 6 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科予防環境医学専攻
学 位 論 文 名	End-of-Life Education for Medical/Nursing Students (医学生・看護学生のためのエンドオブライフ教育プログラム)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 磯 博 康 (副査) 教 授 的 場 梁 次 教 授 中 岡 成 文

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

医療の高度化と施設死の増加により、医療従事者が看取りをする機会が増え、事前指示書、治療の選択（不開始）・中止、脳死など死に関連した医療上の選択に迫られている。それに対して、医学生・看護学生は、看取り体験が少なく、死や死に逝くことを身近なこととして感じておらず、実際の死に直面して何もできないという無力感を抱いている。

また日本では、1980年代より死の準備教育が推奨されるようになったが、医学・看護学系大学において死に関連した教育は十分なされていない。

そこで今回、看取りや死を身近な出来事として体験する機会の少ない医学生・看護学生が、医療現場で直面する現実の死と向き合い、エンドオブライフケア（終末期ケア）が実践できるように教育プログラムを提案する。

〔 方 法 〕

1. 文献調査

エンドオブライフに関する海外の関連文献、専門家団体による教育プログラム文書、および、国内の関連文献を検討し、問題点の整理に用いた。

2. 質問紙調査

インターネット上公開されている医学・看護学系大学のエンドオブライフに関する教育担当者693名へ、郵送法による自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、①講義形式、②講義内容、③教育の現状と課題、④教授するにあたり工夫していることなどである。返信を持って同意を得たものとし、各質問項目は基本集計を、自由記述は内容分析を行った。

3. インタビュー調査

緩和ケア病棟に勤務する看護師6名に、半構造化面接を行った。インタビュー内容は、①緩和ケアを実践する中での戸惑い、②戸惑いに対する対処方法（行動）、③基礎教育の中で受けたかった講義内容（現場に出て必要だと思う内容）。

また、医学・看護学合同授業担当教員4名（医師2名・看護教員2名）に、グループ面接を行った。インタビュー内容は、①医学・看護学合同授業を取り入れた理由、②実施する中での現状と課題について、いずれも発表者がインタビューを実施した。インタビューは対象者の同意後録音し逐語録を作成、調査項目ごとに内容分析を行った。

〔 成 績 〕

1. 質問紙調査結果

講義形式は、エンドオブライフに関する講義は各分野でトピックス的に取り扱われていることが多く、多職種による包括したプログラムをもとに教育されている大学は少なかった。講義内容は、終末期医療（ケア）、脳死・臓器移植、倫理的課題に関するものが多かった。

また、担当教員のエンドオブライフ教育に対する意欲と知識に格差があることや、学生が死や死に近づく過程をイメージできないという現状であった。それに対しては、講義形式だけではなく、視聴覚教材の使用や、体験者からの講義（医師・看護師・患者・家族・遺族）、ロールプレイ、グループワークなどさまざまな工夫をされていた。

2. インタビュー調査結果

緩和ケア看護師は、患者からスピリチュアルな問いを求められた時、感情をぶつけられた時、患者の希望と治療方針にずれが生じた時戸惑いを感じていた。それに対して、同僚や友人に話を聞いてもらう、研修会に参加する、カンファレンスを開催して情報や辛さを共有していた。また、基礎教育の中で受けたかった講義内容は、ターミナル期にある人とのコミュニケーション演習、患者の尊厳、遺族ケアを考える上でエンゼルメイク（死後の処置）をあげていた。

医学・看護学合同授業担当教員は、医学生と看護学生の交流の機会にする、チーム医療を考える機会にするために合同授業を取り入れていた。しかし、各学科のカリキュラムが異なるため時間設定が難しいこと、キャンパスが異なること、教室の収容人数の問題などハード面での課題と、学生のモチベーションが異なることなどソフト面での課題を抱えていた。

以上より、医学生・看護学生のためのエンドオブライフ教育プログラムを提案する。

	テーマ	内容	講義担当者	講義形式
1	イントロダクション	・医療の中の死の位置づけ等	担当教員	講義
2	死をめぐる文化的・宗教的背景	・生と死の歴史的背景等	人文社会系教員	講義
3	死をめぐる倫理的・法的問題	・インフォームドコンセント等	人文社会系教員	講義
4	死や死に近づく過程について考える	・1人称、2人称、3人称の死	担当教員	グループワーク（GW）
5	エンドオブライフの現状と課題（1）	・医療の現状（症状管理）	医師	講義
6	エンドオブライフの現状と課題（2）	・ケアの現状 ・家族の悲嘆へのケア	看護師	講義
7	エンドオブライフの現状と課題（3）	・スピリチュアルケア	スピリチュアルケア実践者	講義
8	エンドオブライフの現状と課題（4）	・患者 家族 遺族からの体験談	患者 家族・遺族	講義
9	演習（1）	・コミュニケーション（告知・看取り）	担当教員	ロールプレイ
10	演習（2）	・エンゼルメイク（死後処置）	担当教員 看護師	ロールプレイ
11	施設見学	・ホスピス、緩和ケア病棟等	担当教員	見学実習
12	事例検討（1）	・臨床倫理検討シート	担当教員	講義
13	事例検討（2）	・医学生、看護学生で討議	担当教員	GW
14	事例検討（3）	・チーム医療について考える	担当教員	GW発表
15	まとめ	・エンドオブライフ ・エンドオブライフケア	担当教員	講義・GW

〔 総 括 〕

エンドオブライフにある人々とその家族と向き合い、生命・生活・人生の質を重視した医療を実践できる人材育成のために、各専門分野の教員が幅広い視点で教育を担うと同時に、実践者からの現場の声を聞くことが重要である。また、グループワーク、ロールプレイ、施設見学など、実践的教育（体験型学習）が不可欠であり、医学生・看護学生が協働で行う演習（コミュニケーション・エンゼルメイク・事例検討）は、チーム医療のトレーニングとして重要である。

論文審査の結果の要旨

医療の高度化と施設死の増加により、医療従事者が看取りや死に関連した医療上の選択に迫られる機会が増えていく。しかし、死を身近な出来事として体験する機会の少ない医学生・看護学生は、現実の死に直面すると何もできない無力感を抱くことは少なくない。

そこで本論文著者は、国内外の文献調査後、医学・看護学系大学のエンドオブライフに関する教育担当者に質問紙調査、および、緩和ケア病棟看護師・医学看護学合同授業担当教員にインタビュー調査を行った。その結果、学生は死や死に近づく過程をイメージしにくく、コミュニケーション能力の問題もあげられた。また、医学・看護学系大学とも具体的な運用方法は各教育機関の教員に委ねられ、多分野の専門家からなる包括したプログラムは少ないことが明らかにされた。そして、患者・家族・遺族が教育に参加して幅広い視点でエンドオブライフを考える機会

を持つこと、さまざまな苦痛を抱える患者に対応するために多職種が共同したチーム医療のトレーニングの必要性が示唆された。

本エンドオブライフ教育プログラムは、各専門分野の教員と実践者から現場の声を聞く講義と、医学生と看護学生共同の演習（コミュニケーション、エンゼルメイク、事例検討）を組み合わせ、チーム医療のトレーニングを含めたところが特徴であり、本論文は学位に値するものと認める。